

Ⅰ・エメリヤノフその他著

『チミリヤーゼフ・コルホーズ』

モスクワ国立農業文献出版社一九五四年刊、二一六頁

И. А. Емельянов, В. М. Абулгоров и А. А. Калашников, Колхоз имени Тимирязева.

Писл. Москва 1954

丸 毛 忍

(一)

ソ連では最近、知名のコルホーズの議長や農業技師が、自分たちのコルホーズの経験を記述した本を沢山出版しているようである。これらの本は、農業専門家やコルホーズの指導的な幹部、あるいは積極分子などを対象として書かれており、おそらく、従来から行われてきたコルホーズの個々の成功した経験の交換や普及を、それぞれのコルホーズ全体についての十分な知識にもついで、より体系的に進めようというのが、刊行の目的であろう。刊行が、一九五〇年にコルホーズが合併して経営問題がこれまで以上に大切になったこと、五三年秋以来の農業政策が先駆的コルホーズの経験、普及の必要をしばしば強調していることとも関係の

あるのは、いうまでもないところだ。筆者のみた数冊だけでも、うすいパンフレットから部厚な装幀本にいたるまで、体裁や記述内容の精疎などさまざまであるが、どれも農業経営を中心に自分たちのコルホーズの概況を記述しており、わが国でいえば、村の歴史や概況をくわしく書いた「何々村々誌」といった類の書物に近いものである——もちろん、コルホーズ（共同経営）と村（自治体）とは別物だが。

『チミリヤーゼフ・コルホーズ』もこういつた本の一冊であり、コルホーズ議長のⅠ・エメリヤノフが二人の農学者の協力を得て書きあげたものである。われわれは本書を通じて、いくぶん物語風にはあるが、従来とかく明かでなかつたコルホーズの個別的な事情をかなり具体的に知ることができる。しかし本書はコルホーズについての厳密な調査報告や専門的につつまんだ研究ではない、また何か新しい問題を提起するようなものでもない——それはむしろ慎重に避けられている。書評しても別に面白い本ではないわけだ。だから、ここではチミリヤーゼフ・コルホーズについての記述の二、三を紹介しながら、ソ連の一流コルホーズの内容をのぞき見る程度にとどめたい。

まず、詳しい目次をかかげよう。

一、チミリヤーゼフ・コルホーズの現在と過去（三六の村、ボドノル土壌の高い収量、ヤスナヤ・ポリヤナ、昔のゴロチエツ

地区、機械組合から農業アルテリへ)

二、コルホーズ生活の二四年(農業アルテリの振り出し、第一年度の成績、コルホーズの敵とその友、最後の個人農、先駆的な経営への道、大祖国戦争の年、戦後の進歩、合併)

三、コルホーズの民主主義——アルテリ運営の基礎(コルホーズ農民総会、農業アルテリ議長の話、部落数の多いコルホーズ運営の特徴、幹部の教育)

四、コルホーズの共産黨員(社会化生産における共産黨員の指導的な役割、社会主義競争、コルホーズの党組織、壁新聞、コルホーズの共産青年同盟員)

五、コルホーズの多部門経営(ゴリキイ市から六〇キロの地点、亜麻・馬鈴薯・牛乳・肉・穀物、どの部門の収入が一番多いか、冬期の現金収入の増加)

六、機械化と電化(MTSの決定的な役割、ゴロヂェツ・MTSとチミリヤーゼフ・コルホーズ、農業技師と畜産技師の援助、肥料用泥炭採掘の機械化、第三トラクター作業隊、コルホーズ生産の電化)

七、耕種(土地の組織、輪作数を増した理由、有機質肥料の広汎な採用、土壌のアルカリ化、労働の組織)

八、亜麻栽培——主経営部門(地区の育種事業、チミリヤーゼフ・コルホーズのすぐれた亜麻栽培者、種子および纖維の高収量)

獲得の経験、亜麻の温水処理)

九、馬鈴薯・蔬菜・穀物・果実・漿果の増産(馬鈴薯の高収量、蔬菜栽培、コルホーズの商品生産部門、高消費地帯の穀物生産、果実と漿果)

十、畜産農場(農業における党および国家の緊急課題、チミリヤーゼフ・コルホーズのクラスノ・ゴルバトフ種の牛、養豚とその発展の見透し、羊の新種、種馬場)

十一、副業(コルホーズの建築材料の製造、煉瓦製造のヴェテラン、コルホーズが副業を発達させる理由)

十二、豊かで文化的な生活へ(コルホーズの労働日、豊かな生活の基礎、労働報酬、コルホーズ農家の収入、コルホーズの文化生活、コルホーズの体育団体)

(二)

チミリヤーゼフ・コルホーズはヴォルガ上流の非黒土地帯、ゴリキイ(旧ニジニ・ノヴゴロド)市をさる約六〇キロの地点にあり、河畔の古い町ゴロヂェツと隣合っている。ゴリキイ周辺の人口稠密な工業地帯に位置しているわけだ。ポドソル土壌で地味はよくないが、降雨量や気温は小麦、ライ麦、麻類、馬鈴薯、牧草などの生育には充分であるという。

この地方は、革命前には、孤立した小さな村が多く、農業は主

に三圃式で、自給用のライ麦、燕麦、馬鈴薯が作られ、販売用としては少しばかりの亜麻があるだけであつた。家畜は農家一戸当たり馬が半頭、牡牛が〇・九頭という程度で、もちろん、大部分富農がもつていた。農業は貧弱であつたが、この地方にはかなり古くから皮革、木工、製酪などのクスタリ工業が盛んで、農民の多くはここに兼業収入の道を求めていた。レーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』にもこの皮革クスタリ工業のことが記されている(大月版、レーニン全集第三巻下四一六頁)。

コルホーズは三六の小さな部落(自然村)が合併してでき上り、一九五三年一月一日現在で戸数五四六、人口一、九六六、うち一、〇五五人が労働可能なコルホーズ農民である。土地面積は全部で二、九七四ヘクタールで、うち耕地二、二一八ヘクタール、園地二三ヘクタール、天然採草地三四ヘクタール、放牧地一七九ヘクタールとなつている。この農用地面積はかりに農家一戸当たりにおおしてみると約四・五ヘクタール、労働可能な農民一人当りでは約二・三ヘクタールにすぎず、決して大きくはない。家畜数は一九五三年十月一日現在、牛四六九頭、うち牝牛二二五頭、豚四九八頭、羊四〇二頭、家禽二、六八二羽、馬三六九頭であり、特別に多いとは考えられない。耕種では亜麻が現金収入の大半を占めている。工業都市の近郊にあるため、亜麻とならんで、野菜、馬鈴薯、畜産品も重要である。なお、コルホーズは現在六台のト

ラックと一台の乗用車を所用しているという。

チミリヤーゼフ・コルホーズの結成事情にちよつとふれておくと、現在コルホーズの一部落となつているエメリノの村ソヴェートの図書室を本拠とする啓蒙活動が実を結んで、一九二六年にはじめて信用および購買販売協同組合がゴロヂェツ地区にでき、次いで翌二七年にエメリノのすぐ隣部落のメドヴェヂェツヴォに機械組合が生れ、これが発展して三〇年四月この地区で最初のコルホーズとなつた。ここでも協同化は流通部面から生産部面へという典型的なコースをたどつたわけである。チミリヤーゼフ・コルホーズの結成当時は参加した農家はわずか七戸、土地二五ヘクタール、馬二頭、牝牛三頭にすぎなかつたが、その後三三年に設立されたゴロヂェツ・MTSの援助と相まつて、コルホーズは次第に拡大強化された。だが非黒土地帯は穀物地帯にくらべて集団化のテンポがおそく、その完了は若干遅れたといわれる。

チミリヤーゼフ・コルホーズは一九五〇年の六月に、全国的なコルホーズの合併運動の一環として、隣りのチャパーエフ・コルホーズと合併した。チャパーエフ・コルホーズは同地区ではやはり進んだコルホーズの一つだというが、前者にくらべると農家数は六六戸、耕地は五分の一しかなく、収量や収入も低く、全般的に劣つている。したがつて彼には合併は有利とみられたが、チミリヤーゼフ・コルホーズの方では、合併のため所得や一労働日あ

たりの支払が減りはないかと懸念されていた。本書のデータによれば、結果はむしろ逆で、合併後、所得や一労働日当りの支払は増加しているようである。しかし、同一のことがホルホーズの合併について一般的にいわれるかどうかは、はなはだ疑問である。

ホルホーズの運営はホルホーズ農民の総会の決定にしたがつて行われるが、チミリヤゼフ・ホルホーズでは毎年八、九回の総会が開かれる。執行機関である理事会には二人の婦人を含めて九人の理事がいるが、理事にはホルホーズ議長と党書記をのぞけば、個々の農業生産部面の責任者が選ばれている。本書の著者エメリヤノフは一九三〇年以來二五年近く引き続きホルホーズ議長をつとめ、今では同時に社会主義労働英雄、最高ソヴェート議員である。作業隊長や畜産場長などにも五年、十年の経歴をもつているものが多い。だが、このようにホルホーズの幹部が固定化していることは、合併にともない経営の一層の近代化をとげようとしている折柄、いろいろ問題になる点が多いと思う。

チミリヤゼフ・ホルホーズは三六の部落からなるが、電話、自転車、トラックなど交通通信機関を適切に利用し、下級の指導者の創意を尊重していけば、部落の多いことはホルホーズ運営の障害にならないという点を本書は特に力説している。これは部落を一か所に集めてしまふ農業都市計画の失敗を弁證しているもの

としか考えられない。

(三)

チミリヤゼフ・ホルホーズは多角経営ホルホーズとして有名ならしく、先にみたとおり、亜麻、馬鈴薯、野菜、穀物を作り、乳牛、種馬、豚、羊、家禽を飼い、また果樹栽培や養蜂などもやっているが、ゴロヂェツ地区の他のホルホーズと同じく、亜麻にかなり専門化しているといえよう。

作付面積のうちわけはよく解らないが、一九五二年について穀物九七二ヘクタール、うち小麦一六九ヘクタール、亜麻一二三ヘクタール、馬鈴薯一五六ヘクタール、蔬菜一〇〇ヘクタールという数字がひろいだされる。これに対して、同年のホルホーズの部門別現金収入は耕種作物七三%、畜産二%、副業二%、雑収入四%であり、亜麻は耕種作物からの収入の七二%、ホルホーズの収入全体の半分を占めている。

これからも亜麻の単位面積当り収入のきわめて高いことが知られるが、亜麻はホルホーズの総作付面積の六一七%を占め、耕種作物についてやされる労働日の一七%が投ぜられ、現金収入の半分を得ているという。また、亜麻にはスターリンが「ソ連における社会主義の経済問題」でべている商品代償制度が適用されており、亜麻の国家への売却と引換えにやすい価格で穀物その他があ

たえられるから、その栽培は有利である。

耕種作物では輪作と施肥が一番問題だが、現在チミリヤーゼフ・コルホーズには十一の輪作が行われ、それぞれ十一の作業隊が所定の耕地について一輪作期間を受けもっている。作業隊の隊員の数は九四〇名に上る。輪作のやり方はさまざまだが、ここではふれない。化学肥料は亜麻にもつと多く与えられているが、有機質肥料や泥炭肥料の施用が特に奨励されている。

作物の収量はソ連のコルホーズとしては相対的に高く、一九五〇年のヘクタール当り収量は穀物が一六・三キントナル、亜麻が種子六・四キントナル、纖維四・八キントナル、馬鈴薯二二四キントナルであつた。

このコルホーズの畜産は、畜産品の供給だけでなく種畜による繁殖をも行つているところが一つの特色である。牛、豚、羊、家禽、馬の共同畜産場がそれぞれ五つ設けられている。羊と馬では繁殖関係が重要である。革命前から中央非黒土地帯では馬の飼育が盛んであるが、この地方では農業の機械化の進んだ今日でも、農業用および運搬用として馬はなお利用の余地が大きいという。

ゴロヂエツ・MTSとコルホーズとの協力関係については詳細な記述があるが、ここでは省略するよりない。近年畜産部門の電化が進んだことと、亜麻、馬鈴薯、野菜などの栽培に機械のはいつたことが注目される。

なおチミリヤーゼフ・コルホーズでは副業として煉瓦、瓦、石灰の製造、木工、製粉、裁縫、製靴、製酪、かごあみ、鍛冶などを行つてゐるが、この場合コルホーズ農民を主生産から引離さないような考慮が払われており、農繁期にはこの労働力はすぐ農業部にまわすことができる。

(四)

チミリヤーゼフ・コルホーズの農民に対する分配は年々増加しており、一九五三年には一労働日当り現金一〇ルーブリ、穀物一・五キロ、馬鈴薯・蔬菜七キロ、飼料一・三キロが分配された。このコルホーズでは、年間に一労働力当り平均二五〇〜三〇〇労働日、一農家当り五〇〇〜六〇〇労働日をかせぐといわれる。現在コルホーズでは一、八〇八のノルマと支払賃率が行われているが、うち四五七が耕種、三〇〇が園芸、七八が畜産に関するものである。これをもととして作物別、作業隊別の仕事の量と労働日支払量がコントロールされるわけである。農民の住宅は最近新築されたものが多いが、木造で、台所と居室の間を壁で仕切つたごく簡素なものようである。

コルホーズには三つの初級学校と一つの七年制学校、映写設備のあるクラブ、幼稚園、その他の社会施設がある。コルホーズの家には全部が電灯をもつており、ラジオも普及している。今日コ

ルホーズ農民には読み書きができないものは皆無だという。コルホーズのクラブは四〇〇人を収容できる広間があり、ここを中心に種々の文化活動が行われる。図書館には三五〇冊の本が所蔵されている。またコルホーズには総合病院と産院があり、昨年はさらに二〇のベッドをもつサナトリウムが新設された。スポーツも盛んで、スキー、フットボール、力技、射撃、自転車競争などが行われ、約一五〇名の男女の愛好者があり、なかには全国的に有名なチャンピオンもいるほどである。このスポーツの状況をみてもコルホーズの生活が都市の生活にほど近づいていることが知られよう。

なおチミリヤーゼフ・コルホーズみたいに有名になると、毎年各地から多数の見学団の訪問をうけるが、たとえば、五一年には三三団体約一千人に上り、そのなかにはフィンランドやハンガリーの農民たちもまじっていたという。

(五)

なるほどこの程度の概況がくわしく書いてあれば、ソ連のコルホーズの幹部ならただちにいろいろ会得するところがあるだらうが、われわれ外国人にとつてはまだ何も解らないと同じである。本書に散見する断片的な数字を集めていろいろ計算してみなくては何もない。しかし本書はチミリヤーゼフ・コルホーズにつ

いて正確な計数的把握を行うための材料を提供してはいないようだ。たとえば、作物別の収量はわかつて、作物面積はあいまいであり、また作物別の生産量および外部へ販売された量、その価格にいたつては全く五里霧中だというはかない。コルホーズ農民へ分配された量もはつきりとはつかめない。さらにコルホーズ農家の私経営からの所得や附近の工場などへ通勤しているものの数などもわからない。一言でいえば、コルホーズのバランス・シートを知ることができないわけだ。

またチミリヤーゼフ・コルホーズと比較できるような同一地区、全国についての数字が与えられていないので、このコルホーズの相対的な地位を知ることができないうらみがある。

本書のような内容では、ソ連のコルホーズの幹部であっても、コルホーズを運営していく場合、経済的合理性の基準をどこに求めたらいいかといった点では、あまり学ぶところが無いのではなからうか。ソ連の読者はどう思うか知らぬが、われわれにはそこらあたりが甚だものたりない気がする。